

Electronic Beowulf Edition の MS Reading について

小山 良一*

(平成 22 年 10 月 29 日受理)

MS Reading of Electronic *Beowulf* Edition

Ryoichi KOYAMA*

The extant manuscript of *Beowulf* is the only text. It means that we have limited other sources of information to rely on. Moreover, it has deteriorated to a great extent due to the long years of transmission and the damage caused by the fire. Therefore, there exists in the text quite a few illegible parts, which need restoration, and also dubious parts, which need emendation. So until now a number of scholars have published various editions according to their interpretation. Among them, Kevin Kiernan is the most conservative editor, who argues that the MS should be more respected. So in his *Electronic Beowulf* he makes an attempt to read the text at its face value.

In this paper some features of his edition of *Beowulf* are introduced and a few problems in his MS-reading are discussed.

Key words : *Beowulf*, Text, Emendation

1. はじめに

*Beowulf*についてはこれまで多くの edition が発表されており、Lapidge (1990)によれば、Kemble, Ettmüller, Trautmann らの emendation 積極派と Wülcker, Wyatt, Chambers らの MS 尊重派の両極の間で揺れ動いている、ということである。なかでも、写本ではなく作品としての *Beowulf* の成立を、8 世紀ではなく 11 世紀と主張する Kiernan は最も過激な conservative editor であろう。Kiernan は *Beowulf and the Beowulf Manuscript* (pp. 13 - 63) で、Viking の英雄物語が、Viking の脅威にさらされていた時期の England で書かれたはずがないと想定されることから、現存写本の成立を少なくとも 1016 年以後、Cnut the Great の治世の間とし、作品としての *Beowulf* の成立時期も、もし最も一般的に認められている 8 世紀頃であったとすると、その後の、England が Viking の脅威にさらされていた時期を越えて何世紀にもわたって England で語り継がれた可能性は低い、つまり各方言・各時代に写し続けられてきた写本の transmission がない、と考えられることなどから、作品と写本成立の時間的隔たりはごく僅かであるとし、特に第 2 scribe が作者に近い立場から全体をかなり構成しているので、従来行われてきた種々の emendation は必要が無く、現存写本を尊重すべきであると主張している。従って *Electronic Beowulf* 収録の彼の edition には、従来 emend されていた箇所を MS 通りに読もうとしている箇所が多数存在している。

* 環境科学科 (教養) 教授

しかしながら、現存の *Beowulf* 写本は 1 つしかなく、火災にあったり、保存状態が悪かったりしたため判読不可能な箇所や、scribe による写し間違いと見られる箇所もあり、推定による復元や改訂が不可欠であり、そのため今日まで多数の edition の存在という結果になってきている。

本稿では、Kiernan による *Electronic Beowulf* の edition の特徴をまとめ、その問題点と、Kiernan が主張するような MS reading が可能と思われる箇所の一部を、Klaeber (4th edition) の text と対照し、Wrenn・Bolton, Dobbie, Jack, Mitchell & Robinson を参考に検討を加えたものである。なお、本稿は平成 18 年 12 月の日本中世英語英文学会、第 22 回研究発表会での研究発表『*Electronic Beowulf* の text と glossary について』の edition に関する部分と、平成 19 年 6 月の日本中世英語英文学会東支部、第 23 回研究発表会での研究発表『*Kiernan's Beowulf Edition* の MS Reading について』を統合し増補したものである。

2. *Electronic Beowulf* の edition の特徴

2-1 lineation と punctuation

Kiernan は、現存 MS 重視という立場から、従来の text で行われていた、metre や context から MS に無いものの挿入を極力避け、MS をなるべく変えない形で text を提示している。1 例を挙げる。

(Kiernan) 240 hider ofer holmas?"

[H]e wæs endesæta, ægwearde heold,

(Klaeber) 240 hider ofer holmas? [Hwæt ic hwī]le wæs
endesæta, ægwearde hēold,

Dene にやってきた *Beowulf* の一行を Hrothgar の沿岸警備の武士が誰何する場面であるが、Klaeber の edition では context を考慮して、[Hwæt ic hwī]le wæs と MS には無い語句を挿入しているが、Kiernan は無理に語句を挿入せず、ブランクにしている。なお MS はこの部分にギャップは無く、追い込みになっている。

いわゆる hypermetric verses(1163-1168)についても、以下のように独自の lineation を行って、Klaeber などでは 6 行にしているものを Kiernan は 9 行にするなどして、合計 14 箇所の lineation の変更を行い、最終的には伝統的な 3182 行ではなく、3184 行にしている。

(Kiernan)

(g)an under gyldnum beage þær þa godan

twegen sæton, suhtergefæde(r)an;

þa gyt wæs hiera sib ætgædere, æghwylc

1165 oðrum trywe. Swylce þær Hunferþ þyle

(Klaeber)

gān under gyldnum bēage þær

þā gōdan twēgen

sæton suhtergefæderan; þā

gyt wæs hiera sib ætgædere,

1165 æghwylc oðrum trywe.

Swylce þær *Unferþ* þyle

æt fōtum sæt frēan Scyldinga;

<p>æt fotum sæt frean Scyldinga. Gehwylc hiora his ferhþe treowde, þæt he hæfde mod micel, þeah þe he his magum nære arfæst æt ecga gelacum.</p>	<p>gehwylc hiora his ferhþe trēowde, þæt hē hæfde mōd micel, þēah þe hē his māgum nǣre ārfæst æt ecga gelācum. Spræc ðā ides Scyldinga: þæt he hæfde mod micel, þeah þe he his magum nære arfæst æt ecga gelacum.</p>
--	---

1170 Spræc ða ides Scyldinga:

Punctuation については、Klaeber の text ではセミコロンが多用されて、長い文になっていたものを、短い文に区切っているのが特徴的である。例えば(Kl. 1563 - 1569)(Ki. 1565 - 1571)の7行を、Klaeber, M. & R, Wrenn-Bolton は、セミコロンを使って1文に、Jack は2文にしているのに対し、Kiernan は5文に分けている。

2-2 Alliteration

Kiernan の MS reading のもう1つの特徴は alliteration より MS 重視という姿勢である。Kiernan, 1996, pp.186-187 で、彼は「*Beowulf*のような長い詩で生ずる、意図的な alliteration の脱落は、全部がそうという訳ではないが、転写の誤り scribal corruption というより intelligent variation と見なすべきだ」“... are marred by editorial alliteration. They ought to be printed without alliteration, the way they appear in the MS.”とし、alliteration を復活するために MS を変更すべきではないとの主張を繰り返している。一部例を挙げると、

84a. secghete ([e]cghete), 707a. synscaþa ([s]clyn[s]ceapa), 1073a. hildeplegan ([lind]plega), 1981a. side reced (heal-reced), 2523a. reðes ond hattres ([o]reðes, [a]ttres) 965a. handgripe ([mund]gripe), 2298b. hilde ([wiges]), 2916b. gehnægdon (genægdon)等、alliteration のための emendation より MS reading を採用している。なお、括弧内が普通行われている emendation である。

965a. handgripe, 2298b. hilde 等、alliteration が成立しないため、従来同意語に置き換えて emend されている箇所も Kiernan ではそのままになっている。

2916b. gehnægdon は double alliteration を避けるために Grein の suggestion に従って Holder, Trautmann, Holthausen, Sedgfield, Chambers, Klaeber も h を落とした形で emend してる。

2-3 Restorations と Emendations

(Orchard, 2003)によれば、MS が何らかの原因で読めない箇所を、推測して復元しようとする Restorations と、MS で判読できるものを変更する Emendations について、Kiernan は前者については124例を認めているが、後者は91例しか認めていないとのことである。

Electronic Beowulf 収録の glossary は全語形とその出現箇所が網羅されており、

emendation や restoration については、以下のように表示されている。

(1) **galgtreow**, n., *gallowstree*; dp. **galgtreowu[m]** 193v3:2941 (usu. em.).

(2) **helm**, m., *protection, cover; helmet*; as. **hel[m]** *189r15:2724 (usu. rest.);

(3) **miht**, f., *might, power, strength*; as., **m[iht]** *189Ar18:2679 (usu. rest. **m[æ̀rða]**)

(4) **hafenian**, wk. 2, *to raise, lift up, heft*; [**hafenian**] *160r17:1374 (usu. em. [**hydan**])

(5) **wracu**, f., *revenge, punishment*; as. **wræce** 190r13:2772 (usu. em. **wræt[e]**)

(1)と(2)はそれぞれ従来の emendation と restoration を踏襲しているもので、両者を合わせて128箇所、(3)と(4)はそれぞれ従来とは違う restoration と insertion 挿入をしているもので、両者を合わせて74箇所、(5)は、従来は emendation されているが、Kiernan は MS のままにしているもので、142箇所にのぼる。

つまり、(5)のような142箇所は Kiernan は MS reading が可能と判断したものと考えられるところである。

しかしながら、現存写本は既にかなり傷んでいて、読めない箇所がかかなりあるため restoration はもとより、写本で読める箇所でも scribal errors 等により写本通りの読みでは意味が通じない箇所もまたかなり存在するので、emendation も不可欠である。従来の種々の editions では意味を重視して、語形を変えたり、不足を補ったりしているが、Kiernan は自身の主張に基づいて CD の edition では構文上無理でも、一応 MS 形がまともな語形をなす場合はそのまま提示し、glossary でもその語義を記して、後に()で usu. em. ...としている。しかし MS 通りの読みをしようとする、意味の通りにくい箇所がかかなりあり、MS を正確に提示しようという意図は達せられているが、どう解釈していいかわからない箇所が多々あるのもまた事実である。更に現代語訳や注釈がないので、我々は punctuation と glossary を頼りに彼の解釈を推測するしかないが、glossary にもかなり誤りと思われる箇所があり、解釈が困難な場合が多々ある。以下、その一部を検討してみたい。

3. Kiernan' s MS reading (1)

ここでは emendation の相違のため、従来の解釈と異なる、あるいは MS のままでは意味が通らない例を検討する。なお、例に付けた行数字は例の始まりを示し、必ずしも例の箇所ではない。

3-1 Heorot で Beowulf に掴まれた Grendel が逃げたいと思う場面である。

(Kiernan 764b.) (**þæt**) he wæs geocorsið / þæt se hearmsca(þa) to Heorute ateah.

(Klaeber 765b.) **Þæt** wæs gēocor sīð, ...

Klaeber は (Wrenn-Bolton, M. & R., Jack も) Grein の emendation を踏襲して、**Þæt** を主語に取って、“It was a sad journey that the harm-doer traveled to Heorot.”と解しているが、Kiernan は MS 通りに he を残し、接続詞 **þæt** “so that”を挿入しているので、“so that he was a sad journey”となってしまう意味不明である。

3-2 Mōðþryðo が Offa と結婚後心を入れ替えて彼に愛情を持った、という件の 1 部分。
(Kiernan 1959a.) Ðær hio syððan well ... hiold heahlufan wið hæleþa brego, / ealles moncynnes ... / þæs selestan bi sæm tweonum, (There she afterwards well ... held great love towards the men's ruler, of all men, ... the best (man) between the seas,)

(Klaeber 1956a.) þ[one] sēlestan bi sæm twēonum, (Thorpe)

1956a.(Kiernan1959a.)の þæs を Kiernan は emendation せずに gen.sg.とし、selestan も同じ格にしているが、そうすると、ealles moncynnes と並列になってしまう。やはり、Thorpe が emend したように þ[one] sēlestan として、hæleþa brego と並列にする解釈の方が正しいのではないかと思われる。

3-3 Wīglaf が Beowulf を助けに行くところ。

(Kiernan 2699b.) ac sio hand gebarn / modiges mannes, þær he his mægenes healp,

(Klaeber 2698b.) þær hē his mæg[e]s healp, (Kemble) (but the hand of the brave man, then he helped his kinsman,)

Kiernan は 2699b.の mægenes をそのまま“might, strength, power”と解釈しているが、helpan は gen.か dat.を目的語にする動詞なので、その目的語と考えられるが、“then he helped his power”では意味不明である。Kemble のように mæg[e]s とすれば “he helped his kinsman”となって意味が通る。

3-4 Wīglaf が竜の洞窟に入って行って中を見る場面。

(Kl. 2771a.(Ki. 2772a.)) Of ðam leoman stod, / þæt he þone grundwong ongitan mea(hte), / wræce giondwilitan: (From that a light shone forth, so that he could see the ground surface, look over the ? revenge.)

Kiernan は 2772a. wræce をそのまま “revenge, punishment”としているが、ここは明らかに「復讐」ではなく「飾り」の意味であるから、Thorpe の emendation ‘wrætte’ に従うべきではないかと思われる。

3-5 Grendel 退治に来訪した Beowulf 一行に対する歓迎レセプションで、Hrothgar が退出する前の場面。

(Kiernan)

(Klaeber)

650b Werod eall aras.

651b

Werod eall arās.

Grette þa guma [guman] oþerne,

[Ge]grētte þā guma oþerne,

Hroðgar Beowulf, 7 him hæl abead,

Hrōðgār Bēowulf, ond him hæl

ābēad,

(All the troop arose. Then a man greeted to the other, Hrothgar to Beowulf, and (they) wished him a good luck.)

ここでは MS は意味の問題は生じない。Klaeber ら多くの editors は、652a の MS による Grette þa だけでは音節数が足りない short verse になるため、MS にない Ge を Grette の前に補い、[Ge]grette þa と弱強弱強の B 型になるように emend している。この emendation は Klaeber のほか Dobbie, Wrenn, Jack, M & R も採用している。唯一 Kiernan だけが guma を前に持っていき、そのため short verse になった b-line に[guman] を挿入しているが、redundant であり、2985 Penden rēafode rinc ōðerne, [その間に略奪した、 武士(E)がもう一人(O)から]から明らかかなように OE(Mod E)の‘one another, each other’の idiomatic な表現法にも合わない。従って、[guman]の挿入はかなりおかしいと言わざるをえない。一方の MS reading のために、他方で無理な復元をするという矛盾になってしまった。

3-6 Beowulf 一行を歓迎する旨を Hrothgar が家来 Wulfgar に告げるよう命令を出しているところ

(Kiernan)

388 Gesaga him eac wordum, þæt hie
sint wilcuman
Deniga leodum.” Word inne ahead.
“Eow het secgan, sigedrihten min,

(Klaeber)

388 gesaga him ēac wordum, þæt hīe sint
wilcuman
Deniga lēodum.’ [Ðā tō dura ēode
wīdcūð hæleð,] word inne ābēad:
“Eow hēt secgan, sigedrihten mīn,

(Say to them in your speech, moreover, that they are welcome among the people of the Danes.’ He announced the speech within: ‘My lord orders me to tell you ...’)(Kiernan 1996, p.187)

[Then the widely known warrior went to the door,]

Klaeber は alliteration の必要性から、MS にはない[]の部分挿入しているが、Kiernan は、punctuation を工夫することで十分意味が通ずると、*Beowulf and the Beowulf Manuscript* の中で特に取り上げて、挿入の必要はないと主張している。なお Dobbie は、ここは half-line 2つが scribe によって抜かされた可能性が高いと言って、Trautmann, Grein 等多くの emendation を紹介しているが、自身の edition では 389b-390a をブランクにしている。M.& R. と Jack もブランクにしているが、W. & B. は [Ðā tō dura healle / 390 Wulfgār ēode,]を挿入している。

「意味」が通るように解釈するには emendation が必要であり、それ故に過去様々な「読み」が提案されてきたわけで、Kiernan の主張する「emendation の必要なし」というのは無理なのではないかと思われる。

4. Kiernan’ s MS reading (2)

Kiernan の MS reading は意味が通らないか苦しい箇所が多いが、問題はあるにしても、MS reading が可能かもしれない箇所もあるので、ここではその数例とその問題点を指摘したい。

4-1 Beowulf の一行が Dene の海岸に到着して、沿岸警備の役人に誰何される場面
(Kiernan) (Klaeber)

<p>294b wæpnum geweordad. <u>Næfre</u> him his wlite leoge, ænlīc ansyn. (He is not a hall-retainer, adorned with weapons. May his looks, a unique countenance, never belie him.)</p>	<p>Nis þæt seldguma, 294b wæpnum geweordad, <u>næfne</u> him his wlite lēoge, ænlīc ansyn. (He is not a hall-retainer, adorned with weapons. Unless his looks, a unique countenance, never belie him.)</p>
--	---

Dobbie (1953) の注では Kemble(2ed.)以降、Grundvig 以外は emend しているとのことで、Dobbie 自身も、W. & B.も emend してる。しかし M.& R.と Jack は leoge の subj.を祈願文に取って‘may his looks, his matchless appearance never belie him!’ (Jack)と解し、MS reading を採用し、M.& R.は「不要な emendation」(p.167)の例に挙げているように、意見の分かれるところであるが、MS reading が成立すると考えてもいいのではないか。ただし、ここは、Wulfgar が Beowulf の一行に向かって話をしている途中なので、Klaeber4 が commentary で指摘しているように、M.& R.と Jack の解釈では、話の途中に独り言が挟まるという、文体的な問題が残るが。

4-2 Beowulf 一行が Dene の海岸に上陸後 Heorot に向けて出発し、帰還まで船を繋いでおく様子を述べている部分。

(Kiernan 301) Gewiton him þa feran. Flota (s)tille bad, / seomode on sole sidfæpmed (sc)ip, / on ancre fæst. (Then they started. The ship remained still, waited on the sand, the roomy ship fast on an anchor.)

sole: dat.sg. of *sol*, neut., mud or wet sand

(Klaeber 301) Gewiton him þā fēran,— flota stille bād, / seomode on sāle sīdfæpmed scip, / on ancre fæst. (Then they started. The ship remained still, rested by the rope, the roomy ship fast on an anchor.)

sale: dat.sg of *sāl*, masc., rope

cf. sol: mud, wet sand, wallowing-place, slough (Clark Hall)

Dobbie によれば、Ettmüller に従って、Heyne 以降殆どの edition で sale に emend されているが、Malone は、意味は「ロープ」で、MS sole を採用して、*ā* の円唇化の初期の証拠としているとのことである。なお、Wrenn-Bolton, M & R, Jack とともに *sāle* に emend している。

Kiernan のように解すると、次の on ancre と矛盾し、浅瀬に引き上げられたのか水の上に浮かんでいるのか分からない、という問題があるが、Dene の地形については、

詳しい描写はないので、正確なところは不明であるが、潮の干満があるとすると MS reading も可能ではないかと思われる。

4-3 Grendel を退治した Beowulf に、Hrothgar が祝いの宴席で褒美を与える場面 (Kiernan 1024b) No (he) þære feohgyfte / for scotenum scami(gan) ðorfte. (He had no reason to be ashamed of the dispensing to treasure in front of the gift.)

feohgyfte: gs. of feohgift, f., *fee-giving; dispensing of treasure*. for: prep., *in front of*.
scotenum: *paid things*, pp. dp., of sceotan, st. 2, *to shoot, pay*.

(Klaeber 1025b) nō hē þære feohgyfte / for sc[ē]oten[d]um scamigan ðorfte, — (He had no reason to be ashamed of the costly gift before the warriors.)

feohgyfte: gs. of feoh-gift, f. *dispensing of treasure; costly GIFT*. for: prep., *beFORE, in front of*. scēotendum: dp. of scēotend, m., *SHOOTer, warrior*.

ここで Kiernan は MS scotenum を採り、‘paid things’ と解釈し、そのため feohgyfte を動名詞的な意味の ‘dispensing of treasure’ に解している。そうするとこの文の主語が Hrothgar となり、Klaeber の解釈とは異なる。Dobbie によると、sceotendum への emendation は Kemble からで、以降ほとんどの editor がそれに従っているとのことである。Dobbie, Wrenn, Jack, M & R も emendation を採用している。Kluge は sceotan, ‘to shoot, pay’ の弱変化動作主名詞 scota の dat.pl. として scotenum を採用しているそうであるが、いずれも意味は shooter で、sceotan, ‘to shoot’, pay の pp. scoten の名詞用法からと思われる Kiernan の解釈とは異なる。Kiernan の解釈の欠点は、誰に恥じるのか対象がはっきりしないことで、Klaeber らのように emend すれば「居並ぶ武士たちの前で」と対象が明確になる。feohgyfte は ‘Costly gift’ でも 動名詞的な ‘dispensing of treasure’ でもどちらも成立する。また、韻律からみても Kiernan の for scotenum は short verse で不完全な半行であるが、Klaeber らのように emend すれば韻律も弱強強弱の Type C になるので、Kiernan でも一応意味は通ずるようであるが、emendation の方が better ではあるといえる。しかしながら、この fitt の終わりに、1046-1049 行で「名高い王は馬と宝物を与えた、真実を語ろうとするものは誰もそれには難癖をつけないようなものを。」という件があるので、Kiernan の解釈も成立するかも知れない。

4-4 Beowulf が Grendel 退治に向かう気構えを Hrothgar に述べる場面。

(Kiernan 444b) Na (þu) minne þearft / hafalan hydan, ac he me habban wile / deore fahne, gif mec deað nimeð. (You never need not hide my head, but he will have me fiercely blooded, if death takes me.)

(Klaeber 445b) Nā þū mīnne þearft / hafalan hȳdan, ac hē mē habban wile / d[r]ēore fāhne, gif mec dēað nimeð; (You never need not hide my head, but he will have me stained with dripping blood, if death takes me.)

Dobbie によれば、Gruntvig に従って、Kemble 以降 emend されており、また、Thorklin は MS reading を残すが、*cruore imbuta* “soaked in blood”と訳している、とのことである。Klaeber, Wrenn-Bolton, M-R., Jack とともに *dreore* と emend している。

Clark Hall に *deore, adv., fiercely, cruelly* とあり、ここだけなら MS でも意味は通るが、以下に挙げたように、420a 以外は全て *dat.* の「血によって」という語が伴っており、485a には *drēor-fāh* とあるので、ここは emend すべきであろうと思われる。

(*fāh* from *fēondum* (420a.) 「敵の所から血まみれなって、」 *blōde fāh* (934b) 「血塗られて」 *sweord swāte fāh* (1286a) 「血塗られた剣が」 *brim blōde fāh* (1594a) 「水が血に染まったことに(気がついた)。」 *wæl-drēore fāg* (1631b) 「殺戮の血に染まった」 *þæt hē blōde fāh* (2974a) 「彼は血に染まって」 *driht-sele drēor-fāh* (485a) 「家臣の広間は血ぬられていた」)

4-5 宝物を盗まれた龍が怒って夜洞窟から出て行く場面。

(Kiernan 2308b) *No on wealle læg, / (bi)dan wolde, ac mid bæle for,* (would not lie on the wall and wait, but went with flame)

(Klaeber 2307b) *nō on wealle læ[n]g / bīdan wolde, ac mid bæle fōr,* (would no longer wait on the wall, but went with flame)

Dobbie は、Gruntvig に従って Kemble 以降、von Schaubert 以外は全て *leng* または *læng* に emend しているが、ここはその必要なしとして、自身の edition では MS reading を採用している。Wrenn は脚注で「*læg* とすると、*no* を *wolde* まで関係させるのは構文上無理がある」として emendation を採用し、Jack, M. & R. も同様であるが、*læg, bīdan wolde* のように動詞が並ぶ言い方も、2918f. に *þæt se byrn-wiga būgan sēolde, / fēoll on fēðan;* と、類似した構文があり、ここは MS reading が可能であろうと思われる。

4-6 Beowulf が自分一人で Grendel に立ち向かうという気構えを Hrothgar に述べる場面で 426b. からの *Ic þe nū ðā, ...biddan wille, ...ānre bēne,* 「願いの儀があります」に続く、願 *ānre bēne* の内容。

(Kiernan 430) *þæt ic mote ana —minra eorla gedryht / 7 þes hearda heap!— Heorot fælsian.* (that I may alone, —my troop of warriors and this brave band!— cleanse Heorot.)

(Klaeber 431) *þæt ic mōte āna [ond] mīnra eorla gedryht / þes hearda hēap Heorot fælsian.* (that I may alone and my troop of warriors, this brave band, cleanse Heorot.)

Dobbie は、ここの MS reading は meaningless と断じている。そして、Kemble の suggestion に従って、以後の editions は ond を minra の前に移動させている、とのことで、Dobbie もこの emendation を採用している。W-B, Jack も同じであるが、M-R はダッシュではなくカンマで区切って、Kiernan 同様 gedryht と heap を voc.sg. として MS reading を採用している。そうすると Hrothgar へのお願いの最中に、相互の武士団への呼びかけが挟まれることになるという問題がある。「自分が一人で」Grendel を退治するとの Beowulf の大言壮語も決して不思議ではないし、家来が寝てしまっても Beowulf だけは目を覚ましていたこととも一致する。しかし、夜が更けて Heorot にとどまったのは Beowulf だけでなく彼の率いてきた一団であったことを考慮すると「自分たちだけで」という解釈も十分ありうるので、ここはどちらとも言いがたい。

次もどちらとも判断が付きかねる例である。

4-7 家来とともに Heorot に到着した Beowulf の Hrothgar 王への謁見の申出に対する取次役の Wulfgar の応答。

(Kiernan 394) Nu ge moton gangan in eowrum guðgeatawum, / under heregriman Hroðgar geseon. (Now you may go, in your armours, under the helmets, to see Hrothgar.)

(Klaeber 395) Nū gē mōton gangan in ēowrum gūðgetāwum, / under heregrīman Hrōðgār gesēon;

geatwe (fem.pl.) ‘arms, armour’, getawa (fem.pl) ‘equipments’

ここは Kiernan の glossary で usu. emend. という記述がない箇所であるが Klaeber(3ed.)その他 (Ettmüller, Grein, Holder, Trautmann, von Schaubert, Holthausen, Wrenn, Jack, and M & R) 多くの editors が emend している。Kiernan の採っている MS reading の guðgeatawum も他の editor の guðgetawum への emendation も「戦衣」という意味は同じであり、意味の上からは特に emend する必要はないが、MS の guðgeatawum の後半の要素はほぼ同義の geatwe (fem.pl.) ‘arms, armour’ (この dat. は geatwum) と getawa (fem.pl) ‘equipments’ (この dat. は getawum) の混合形で、普通の語形ではない。

以上 *Electronic Beowulf* の Kiernan の edition を一部ではあるが、検討してみた。MS reading が可能な箇所も多少はあるが、その部分だけを取り出せば可能でも、前後の展開を考えると矛盾したり無理な箇所がかなり多く、Kiernan 自身も認めているように、現存 text は原典ではなく写本であることも考慮すると、過度な emendation は不要であることは言うまでも無いが、MS に固執するのも無理が多く、Lapidge の言うように、必要なところは emend すべきである。

参考文献

- Dobbie, Elliott Van Kirk, ed., *Beowulf and Judith*. The Anglo-Saxon Poetic Record, IV. Columbia U. P., 1953.
- Jack, George, ed., 1994. *Beowulf: A Student Edition*. Oxford U. P., corrected 1995.
苧部恒徳訳 「対訳 ベーオウルフ」1～4. 新潟大学教養部研究紀要 第20(1989)、
21(1990)、22(1991)、24(1993)
- 苧部恒徳、小山良一編著：古英語叙事詩『ベーオウルフ』対訳版；研究社。2007.
- Kiernan, Kevin, et. al. eds., *Electronic Beowulf*. 1.0. British Library and the University of Michigan Press, 1999, 2.0, 2003, 2 CD-ROMs
- Kiernan, Kevin, et. al. eds., *Beowulf and The Beowulf Manuscript*. The University of Michigan Press, 1996.
- Klaeber, Frederick, ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. 3rd ed. D.C. Heath, 1950.
- Fulk, R. D., Bjork, Robert E., & Niles, John D., eds, *Klaeber's Beowulf and the Fight at Finnsburg*, University of Toronto Press. 2008
- Lapidge, Michael, *The Editing of Old English: On the Emendation of Old English Texts*, D. S. Brewer, 1990
- Mitchell, Bruce & Fred C. Robinson / M & R, eds., 1998. *Beowulf: an edition with relevant shorter texts*. Blackwell.
- Wrenn, C.L., ed., *Beowulf with the Finnesburg Fragment*. 3rd ed., rev., by W.F. Bolton. Harrap, 1973.